

## 「福祉機器」雑感 ～それぞれの「良い」～

相模原協同病院

理学療法士 塩沢伸一郎

福祉機器全般に言える事でしょうが本人の「心地良さと」提供側からの視点での「良さ」にしばしば隔たりを生じていると思いますが、皆さんはどのように解決しているのでしょうか。例えば車椅子を作った場合に本人が楽で心地よい場合と、姿勢なり身体にとって良い場合が異なる。このような場合に通常の買い手と売り手の関係では、使う本人のニードが優先されることは当然ですが、医学的な視点や療育的な配慮から本人のニードのまま製品を薦めることが出来ない場合は少ない事ではないでしょう。

数年前に小児科領域の医療技術者の方からこのような話を伺いました。「就学期の脳性まひのお子さんが歩いて学校に行きたいと願っている。補助具などを使えば歩くことは可能であるが下肢や体幹の変形は進めてしまう。それに対して車椅子で登校すれば変形などは遅らせることは出来るが本人の意思に反し、歩くことで体験できる事が減らされていく。」この方は学校での部分的な車椅子の使用を薦めたそうです。医療技術者として明らかに身体に悪いとわかっている事を本人や家族に薦めることは出来なかった結果でしょう。

また、ある脊髄損傷の方で電動車椅子を上手に使う人からこのような話を聞きました。「病院のリハビリでは歩く練習をたくさんした。歩くことは骨や筋肉、内臓に対してもとっても大事と言われ両松葉杖で歩く練習をした。でも、実際には両松葉杖より電動車椅子の方が楽で色々な所に行くことが出来る。」と、言って笑っていました。まったく松葉杖は使っていないそうです。この方にとって楽なこと、そして障害によって制限された世界が道具によって広がる事を望んでいる結果でしょう。

大切なことは本人や家族のニードですが、同じような状況でも時と場合によっても変化もするでしょうし、長い経過の中でも変化は起きるでしょう。最も重要なことは周囲の専門家が様々な視点からたくさんの助言をいつでも出来る環境を持つことではないでしょうか。医学的な配慮は当然ですが、機器のコストや耐久性の問題、またそれぞれの地域での環境整備状況や利用できる社会的な制度などは当然異なります。それぞれの分野での専門家が持っている知識と経験を利用して、その時々に適したものを共に考えていきたいものです。我々がいつも心がけなくてはならないことは、ひとつの視点から「～が良い」と決めない、そういうことかもしれません。